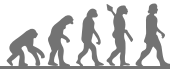


JWCS通信

2024年11月発行
 通巻
 103号
 www.jwcs.org

野生生物保全論研究会

ヒトの進化を”家畜化”から考える ～人新世、人類の過去・未来とは？～ 古沢 広祐 (JWCS理事)



地球を改変するヒトの時代：「人新世」

たったの70年で、私たちヒト（人間）は地球の姿を劇的に変えてしまった。地層には、その痕跡がはっきりと刻まれています。最近の研究では、地球上の哺乳類を重量で計ると何と96%が人間（34%）と家畜（62%）で占められて、野生動物はわずか4%でしかないとのこと（Our World Data）。

専門家の間では、人類の活動が地球に影響を及ぼしているこの時代を、これまでの時代と区別すべきだとの議論が活発に続けられて来ました。それが「人新世（じんしんせい）」という時代名称です。地質学会ではこの名称使用は時期尚早と先送りされましたが、気候変動や新化学物質の急増、生物種の大量絶滅など、人類活動の絶大な影響力はもはや無視できない状況です。

ヒトの過去・今・未来について、人新世の視点から、長期かつ巨視的視点からの展望することで、変化の激しい現代世界を客観視できますし、何か新たに増えてくるかもしれません。とくに、ヒトの進化を加速してきた家畜・栽培化（Domestication）から、絶滅危機、ポストヒューマン時代など、過去から未来まで世界の展望をお話しました。混沌化する現代社会に対し、時空間軸を大きく拡大する視点から何が見えてくるのか、私なりの思考実験でもあります。

人類という存在を相対化する手がかりで、家

畜・栽培化に注目しています。その延長線で、AIとの共存や新たな管理社会の脅威（新・家畜化社会）についてまで、短時間に駆け足の話になりました。ご関心のある方はしばらくアーカイブ視聴できますので、ぜひ本編をご視聴下さい。（JWCSチャンネル：https://youtu.be/EYmvlYOS4_4）

脳の不思議と謎：サピエント・パラドックス

人類進化では、通称で猿人・原人・旧人・新人（ホモ・サピエンス）など複数の人類が存在しており、確認されたもので20数種類の人類が出現（繁栄）して消え去って来ました。唯一私たちホモ・サピエンス（賢い人間）だけが存続し繁栄していますが、その賢さの源は何なのでしょう。頭脳の発達・増大が要因で、原人～旧人で脳容積は急増したのですが、旧人にあたるネアンデルタール人と私たち新人とでは、脳容積はほぼ同じで多少小さ目の傾向がみられるのです。

このように脳容積の拡大が止まり小さ目になりながらも、知能そして文化が飛躍的に発達したのは何故か、ヒトをめぐる謎の一つです（サピエント・パラドックス）。諸説あるのですが、私が注目しているのが、家畜化症候群が関係しているとの仮説です。詳細は省きますが、ヒトの進化が「家畜化」と密接に関係している指摘は昔からありました。本会（JWCS）創設者の故・小原秀雄さんも注目して「自己家畜化」論を展開したのでした（1980年代）。なかなかメカニズムが未解明でしたので、その後は下火になったのですが、最近の研究でメカニズムと実証研究が進んで再び注目されだしたのです。

詳細は省きますが、人類の歴史では長らく狩猟採取時代が続いたのですが、いわゆる文明化

へ歩み出す契機が「飼いならす」（家畜化・栽培化）行為ではないかと考えると、いろいろ謎が解けてきそうなのです。最初に飼いならされた動物はイヌでした（数万年前）。オオカミからイヌへの変身です。家畜化の過程では、従順・協調行動（攻撃性の低下）、毛色変化、歯の縮小、脳容積減少、幼少期の長期化などがみられますが（家畜化症候群）、この変化はそもそもヒト自身でも起きていたのではないかという、自己家畜化論の再評価です。

身体的にはひ弱だったヒトは、集団的な協調性を発揮して勢力を拡大する過程で、相互協力やコミュニケーション能力を高めていったと考えられます。つまり他者や事物を手名付ける行為、一種の道具化する能力です。それこそが人間の優位性なのですが、そこに飼いならし・家畜化・栽培化の働きが大きく影響していたと考えられるのです。

手足/身体、大地/自然、頭脳（知）の拡張、その行方は？

私は、そのプロセスには「道具化」という人類の特性が関係していると考えのですが、「飼いならし」も道具化の一形態です。道具化については、以下の3方向で展開が進行してきたととらえています。

(1) 「手足/身体の拡張」、運動的な身体能力（手足）の拡張で、石器・土器、弓矢、馬車、船、自動車、飛行機・・・と発展してきました。初期の石器利用での手の機能進化が脳機能の進化を促すなど、道具的操作の発展が相互創発的に脳の発達を促してきました。

(2) 「自然/大地の拡張」、これが飼いならしや家畜・栽培化につながる展開です。自然の潜在的能力を人間領域として拡張すると言ってもいいでしょう。農業/栽培・家畜化だけでなく、灌漑・土木・建築、品種改良・生命操作へと展開していく動きです。

(3) 「頭脳（情報処理・社会管理領域）の拡張」、いわゆる知的・文化的な発展です。これは遺伝子の進化から逸脱して、ミーム（文化的自己複製子）的な発展とも考えられます。言語による概念拡張、シンボルや物語の生成、情報的世界の創出としてはAIなども頭脳の外部拡張と考えられます。音楽、アート、宗教（神）、論理、数字、記号、そして科学知体系の構築として発展してきました。また、貨幣・市場により分業や交易・経済圏を拡張し、軍事・統治・福祉を国家や諸機関

などで充実させ、さらには高度なグローバル政治・経済・社会・文化圏を形成してきました。

道具化とは、いわばテクノロジーによる身体機能の拡張なのですが、それは人間を機能（ロボットの存在）としてとらえる工学的な発想で、操作的な拡張志向が強い考え方です。人間の欲望や欲求が外界へ拡張されて、操作対象を広げるような動きです。その操作対象は、人間自身にも及ぶことから、これはまさしく自己家畜化のような姿にまでつながる動きです。他方で心配なことは、外的世界に対しての改変能力（操作的知性）に対して、自分自身の内面・精神性（倫理・規範的知性）が不明瞭ないしは空洞化が起きかねないことです。比喩的に言えば、ゲーテ作品の『ファウスト』の話で悪魔に魂を奪われるような事態が想起されるのです。

近年、トランスヒューマニズムという思想が生まれており、生物的な限界を超えて、さらに超人的な進化を目指そうとする考え方です（世界トランスヒューマニスト協会）。能力拡張の欲求が人類進化の源泉であり、家畜化現象での幼形成熟、幼形進化などで、幼児的好奇心の発現が人間を突き動かしているとする、人類の未来はどうなるのでしょうか？ここで象徴的に想起されるのが、ベンチャービジネスで大富豪になり、火星進出を夢見るイーロン・マスクさんのイメージです。

新家畜化社会、監視資本主義

現代社会の繁栄は、まさにテクノロジーの進化・発展の上に成り立っています。人類は、地球上のあらゆる資源を利用しつつ、宇宙へと進出していくのでしょうか。こうした楽観的な世界観に対して、かつて技術史家ルイス・マンフォード（1895-1990）は、技術体系が人間を機械の部品のように組み込んで支配していくような矛盾含みのメガマシン（巨大機械）化した姿として、批判的にとらえました。

最近の本ではショシャナ・ズボフ『監視資本主義 人類の未来を賭けた闘い』が注目されます。私たちを支えている商品や消費行動、労働（働き方）など、あらゆる情報がデジタル化して集積・管理される資本主義（集産的管理）社会を危惧し、警鐘を鳴らしています。

こうした管理社会化へと進む状況を、家畜（飼育）化への新展開として見ることもできそうです。また、第2次世界大戦での科学超大国ナチス政権の出現のように、私たちは全体主義国家が人間性を破壊・支配する悪夢を経験しました。そしていま直面しているパラドックスと

は、‘科学技術の発展’（操作的知性）と‘人間の尊厳・公正・正義’（倫理・規範的知性）のバランスが果たしてとれるのかではないでしょうか。功利主義的な考え方と、人間性・倫理規範的な考え方のせめぎ合いと言ってもいいでしょう。

そもそも人間存在とは、世界を自らに取り込みつつ改変していく、不安定さの上に揺れ動く存在であり、人類史・世界史のなかでは、諸矛盾を何とか乗り越えて持続してきたのでした。支配・敵対と共存・共生との間で、折り合いを探ってきたのです。多様性と自立性の上に、人間存在としての自己管理（自己家畜化）と新たな可能性（脱家畜化）の模索、危ういバランス上をさすらう道が、今後ともしばらく続きそうです。



※ 補足情報としては、拙著『今さらだけど「人新世」って？ 知っておくべき地球史とヒトの大転換点』WAVE出版をご参照下さい。

※ 参考：公開理論研究会「ヒトの進化を”家畜化”から考える～人新世、人類の過去・未来とは？」
https://youtu.be/EYmvlYOS4_4